HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Ⅰ． 研究の概要と本特集の構成
Author(s)	高橋，彩
Description	【特集】留学生支援の枠組みを考える
Citation	北海道大学留学生センター紀要，16，2-5
Issue Date	2012-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52739
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISC16_001_1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅰ．　研究の概要と本特集の構成

日本の留学生政策は、教育のグローバル化の中でその方向性と戦略が問われている。留学生受入れ政策については、1980年代の「留学生10万人計画」、その後の「留学生30万人計画」で留学生受入れ増大の方針が示され、政策にもとづいた様々な施策が展開されてきた。いずれの政策下でも留学生支援の重要性は認識されてはいるものの、グローバルに移動する学生を大学の現場でどのように支援するかという詳細な具体策までは示されていない。

しかし、大学の限られた人的、経済的、物理的資源の中で、いかに多様な学生に質の高い大学生活を提供できるかは、個々の大学の国際化戦略と関わる問題である。1990年代には、日本でも国際教育交流における留学生支援、とくにアドバイジングに対する学問的蓄積への動きが表れ、それに先行して留学生担当者の議論と研鑽の場も発展してきたが、留学生支援の実践と理論の蓄積はまだ発展の初期段階にあると言ってよいだろう。教育のグローバル化時代に、個々の大学で、個別の留学生支援策がどのような方針のもとで、いかなる方向性を持って取り組まれたらよいのかについて、検討するための視点や枠組みの学問的議論はこれからである。本研究は、留学生支援の理論的枠組みの構築に貢献することを目指して始まった。

研究では支援の特徴と枠組みを把握するために、各国の留学生受け入れの状況を文献やウェブを通した調査により行うことを計画した。しかし、留学生担当者として大学の現場において留学生教育にかかわってきた経験から、統計や政策動向、文字資料等だけでは現場で何が行われているのかを把握することは難しいと考え、各国でいくつかの大学を訪問調査することにした。その国の全体的傾向や政策からは、オリエンテーションの実際や誰が留学生の相談を受けているのか等、必ずしも各大学でどのような種類の支援が主に誰によって提供されているのかわからないためである。

留学生支援の分野では、実際に現場で何が行われているかが重要である。しかし、相談や交流イベントの企画・運営、各種手続きのサポート、学修支援等、留学生支援の仕事そのものは、伝統的な大学の学部・大学院課程での教育や大学の事務的な業務のイメージからはつかみにくい。実際、留学生支援の仕事を把握することは容易ではなく、「留学生アドバイジング」という分野について、その内容を整理し、体系的に論じた横田、白土（横田・白土：2004）も、その意義と重要性を、組織としての大学や広く社会

に認識させる難しさを示唆している。

留学生支援に対する社会的認識が難しい一方で、留学生受入れの諸課題は、教育のグローバル化を背景に、大学が日常的に抱える問題になりつつある。世界的な、厳しい留学生獲得競争にさらされながら、国境を越えてやってくる大量の多様な学生への対応を求められる時代である。この状況下では、言語や異文化、新しい環境で困難を抱える「マイノリティー学生」としての留学生を「支える」という観点からの支援では十分ではなく、多様な学生が充実した学生生活を送れるような「サービス」が必要とされている。

しかし、大学の資源は限られている。新しい教育プログラムの開発や積極的な宣伝・広報活動など、大学は今までにないような「企業体」としての活動にも力を注がざるを得ない一方で、ますます人的・経済的・物理的な多局面での効率的な配分と妥当な資源投入に対する成果を問われている。国によるグローバル30の政策も教育における国家的な効率化、あるいは「選択と集中」の一つの形といってもよいだろう。留学生支援もこのような厳しい高等教育の潮流を背景に、次世代の支援のすがたを求められている。

当研究は、留学生受け入れで先行する三か国の留学生受け入れの状況を知ることで、日本における今後の留学生支援への示唆を得ることが目的である。特に、三カ国の大学への訪問調査を通して、支援の現場からその特徴をあぶりだすことを目指した。研究の結果、留学生受入れについて三つのベクトル（方向性）が浮かび上がってきた。それと同時に、日本の留学生受入れの長所も見えてきた。これは、本研究の当初の目的を超えた成果であった。

研究全体の流れとしては、2010年度は全般的な情報収集をし、主として2011年度にイギリス、カナダ、オーストラリアにおける現地調査を行った。2012年度は主に日本の大学を訪問し、収集した情報の検討を行った。日本の大学については、当初は海外の大学と同様の内容での調査を計画した。実際、先行して訪問調査した二校については、同様の質問項目を携えて関係者と面談したが、調査の過程で日本の大学では海外の大学と比較して留学生支援に教員が比較的多くのケースで携わっていること、またそうでなくても地域との交流や日本人学生との交流などを通して、教育の要素を多分に含んだ支援が行われていることが見えてきた。よって2012年度は、日

本で先進的な留学生支援を行ういくつかの大学を訪問し、教育的な要素を含む支援にあえて焦点を当てて調査することにした。

一般的に「留学生支援」で想定される範囲は多岐にわたるため、あらかじめ三名の研究者で大まかな質問項目を検討し、準備したが、調査では訪問先の状況と各研究者の専門分野・関心により、適宜選択して質問し、またインタビューでは比較的自由に各大学の状況を話していただいた。これは、個々の大学で研究者が面談する留学生支援の担当者の立場、支援・サービスの内容や範囲、提供組織・構造が異なることを予期していたためである。よって、当研究では、横並びで「比較」するのではなく、それぞれの特徴をつかむことに主眼を置いた。つまり、当研究における「比較」は、対象項目を同条件で比較するものではなく、異なる視点で相互を考察することにより、その傾向や性格を浮かび上がらせようとすることを意図したものである。

次章より、イギリス、カナダ、オーストラリアの留学生支援についてそれぞれの担当者が各々の関心領域について論じている。イギリスについては、高橋が、提供される留学生支援の特徴を支援の組織的構造に注目しながら検討した。続く章ではフィルコラが、カナダの留学生支援について、特にキャリア支援に焦点を当てて論じている。この章は英語論文になっている。オーストラリアについては、青木がその政策とともにオリエンテーションに焦点を当てて考察した。最後に、高橋が日本の留学生支援に資する議論を進めるため、近年の日本での支援の中で特徴的な取り組みを紹介しながら、留学生支援の枠組みを考えるベクトルを提案している。

筆者たちがそれぞれの国の留学生支援全体を満遍なくとらえているとは、もちろん考えてはいない。しかし、ある側面からその概況と特徴をつかむことで、教育のグローバル化における支援を考える際の一つの概念枠組みの構築に資することを目指そうとした。

近年我が国の留学生支援は様々な方向に分化している。留学生センターの改組、支援の多言語化、日本人学生を含む現地学生との交流の促進など、留学生受入れの担当者たちは、大学と教育のグローバル化の現実に直面する日々を送っていると言っても過言ではない。本研究が、各担当者や大学が現場で行われている支援を客観的に捉えなおす際の参考になれば幸いである。

付記：
本研究（本特集全体）は、JSPS科研費22530844の助成を受けたものです。

参考文献：

横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング―学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版